

2020年9月3日

シリーズ企画「コロナ後のイノベーション・ハブ」

## 【3】シンガポール、大学・政府が起業家「内製」へ — 東南アジア起業家、主流は留学経験者

主任研究員 上原正詩

(要旨)

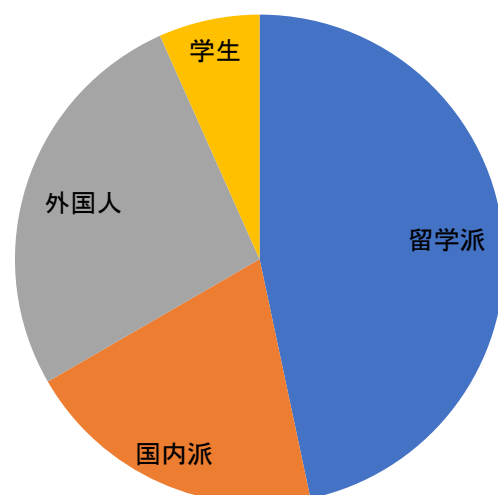
- ▶ 東南アジアの有力スタートアップ15社の創業者を「留学組」「国内派」「外国人」「学生起業家」の4つに分類すると、「留学組」が多数を占めた。
- ▶ 一方、シンガポールは「外国人」が多い。政府も起業家向けの就労許可証を用意するなど、外国人起業家の誘致に積極的な政策を採用している。
- ▶ シンガポールの課題は起業家の「内製化」である。シンガポール国立大学(NUS)をはじめ、各大学が起業家教育に力を入れ、政府も資金面での支援を拡充している。
- ▶ 500スタートアップスなど海外の有力アクセラレーターも東南アジアに進出している。Yコンベネーターの育成プログラムにも東南アジアからの参加が増加傾向にある。

東南アジアのシード、初期段階のスタートアップはどこから来るのか。米国などでは大学、アクセラレーターがスタートアップを生み出すエンジンとなっているが、東南アジアでは系統的に起業家を生み出す仕組みが形成される以前の段階にあると思われる。

同地域のスタートアップ生態系は、比較的评价額が大きいスタートアップ群で見ると、インドネシアのゴジェック、シンガポールのグラブ、VC大手の米セコイア・キャピタル、シンガポール政府系ファンドなどがキープレーヤーとなっていた(シリーズ企画【2】「東南アジア生態系、ゴジェックとグラブが2分」参照)。スタートアップはシード、初期、後期などいくつかの段階を踏んで成長するが、シリーズ企画【2】で見たのは、後期段階に近い生態系のキープレーヤーだ。

シリーズ企画【2】では、東南アジアのスタートアップのうち、評価額3億ドル以上の有力スタートアップ15社<sup>1</sup>を選び、それらとVCなど投資家との関係を調べた。今回はこの15社の

図表 1 東南アジアの有力スタートアップ15社の創業者の出身分布(企業数)



(資料) PitchBook(7月30日時点)

<sup>1</sup> グラブ、ゴジェック、トコペディア、トラベロカ、ブカラパック、トラックス・イメージ・レコグニッション、レボリューション・プレクラフテッド(以上、ユニコーン)、ジリンゴ・ショッピング、デスクラ、コピ・ケナンガン、VNG、アクラク、エムダック、プロパティグループ、カルーセルの15社

創業者がどのようなバックグラウンドをもっているかをまず見る。大きく 4 つ——①海外留学経験を経て自国に戻り起業した「留学組」、②国内の大学を卒業し自国で起業した「国内派」、③東南アジアに来て起業した「外国人」、④国内の大学の起業教育を経験して起業した「学生起業家」——に分類すると、留学組が多数を占め、外国人が続いた(図表 1)。

### ■インドネシア、留学組が活躍

インドネシアのゴジェック、トラベロカ、コピ・ケナンガンの 3 社、シンガポールのグラブ、フィリピンのレボリューション・プレクラフテッド、ベトナムの VNG の創業者はいずれも米国などに留学経験のある国際派だ。

東南アジアの 2 大勢力、ゴジェックとグラブの創業者の生い立ちは非常に似ている。ゴジェック(ジャカルタ)の創業者ナディム・マカリム元 CEO はシンガポール生まれのインドネシア人で、米ブラウン大学に留学し国際関係学を学んだ<sup>2</sup>。米マッキンゼー・アンド・カンパニーのアソシエイツとして働いた後、2009 年、ハーバード・ビジネス・スクールに留学。MBA(経営学修士)を取得し、2011 年にゴジェックを創業した。一時、シンガポールのネット通販サイト、ザロラのインドネシア法人の立ち上げもマネージング・ダイレクターとして手掛けたが、ゴジェックに専念することにした。共同創業者のミケランジェロ・モラン氏は米アカデミー・オブ・アート大学(サンフランシスコ)出身のウェブ・デザイナーで、マカリム氏とはシンガポールにある高校ユナイテッド・ワールド・カレッジ・オブ・サウスイースト・アジアの同級生である。もう一人の共同創業者ケビン・アルウィ共同 CEO は南カリフォルニア大学で企業金融などを学び、マカリム氏とはザロラでともに働いた。

グラブ(シンガポール)の創業者兼 CEO のアンソニー・タン氏はマレーシア出身で、日産自動車の組み立てなどを手掛けるタン・チョン・モーターの創業一族に生まれた。シカゴ大学に留学し、経済・公共政策を学び、卒業後にタン・チョン・モーターで働くが、2009 年にハーバード・ビジネス・スクールに再び留学。在学中にライドシェアリングのアイデアを思いつき、2012 年にグラブを創業した。共同創業者のタン・ファイリン氏もマレーシア出身で、英バース大学で機械工学を専攻。卒業後、マッキンゼーのマレーシア拠点でビジネスアナリストとして働き、2009 年にハーバード・ビジネス・スクールに留学。そこでアンソニー・タン氏と知り合った。グラブ、ゴジェックの創業者 3 人はハーバード・ビジネス・スクールの同級生である。

トラベロカ(ジャカルタ)を創業したフェリー・ウナルダイ CEO はインドネシア出身で、米パデュー大学に留学し数学・コンピューター科学を学んだ。マイクロソフトに就職後、2011 年にハーバード・ビジネス・スクールに入学。そこで航空券、ホテルの予約サイトの立ち上げを考え、2012 年にトラベロカを創業した。ハーバード・ビジネス・スクールではグラブ、ゴジェックの創業者らの 3 年後輩となる。共同創業者のアルバート・アルバート氏とはパデュー大の同級生である。共同創業者で前 CTO のデアント・クスマ氏はスタンフォード大学でコンピューター科学を学び、リンクトインなどで技術者として働いた<sup>3</sup>。ウナルダイ氏とはマイクロソフトで知り合った。3 人とも米国留学・帰国組だ。

インドネシアではもう 1 社、持ち帰り専門のコーヒーチェーン、コピ・ケナンガン(ジャカルタ)(評価額 4.8 億ドル)の創業者も留学組。エドワード・ティルタナタ CEO は米ノースイースタ

<sup>2</sup> 2019 年 10 月、ジョコウィ政権下の教育・文化相に就任し、CEO を辞任。ゴジェックはケビン・アルウィ氏とアンドレ・スリスツヨ社長の共同 CEO 体制に移行した。

<sup>3</sup> クスマ氏は 2018 年 12 月に辞任し、シンガポールで別のスタートアップの立ち上げを準備中。

ン大学で科学、金融・会計学を学んだ。2015年に紅茶専門店ルイス・アンド・キャロルを創業し、2017年にコピ・ケナンガンをはじめた。共同創業者ジェームズ・プラナントCOOは南カリフォルニア大学で科学、経営学を専攻し、米ロヨラ・メリーマウント大学でMBAを取得。投資アナリストや企業広報などを経て、ケナンガンに参加した。2人は高校時代の同級生だ。

フィリピン唯一のユニコーンで、プレハブ住宅開発のレボリューション・プレクラフテッド(マニラ)の創業者ロビー・アントニオCEOはフィリピンの不動産会社センチュリー・プロパティーズの創業者ホセ・アントニオ氏の子息。米フォーブスが親子の資産を4億ドルと推計し、2018年のフィリピン富豪トップ50に入る資産家一族の出身だ。ロビー氏は米ノースウェスタン大学を卒業後、スタンフォード大学でMBAを取得。ニューヨークで高級マンション「センチュリオン」を手掛けるなど不動産ビジネスで実績を積んだ後、2015年にレボリューションを設立した。電子商取引ビジネスなども統合した持ち株会社レジデント・ホールディングスを2019年に設立し、そのトップも兼務している。

ベトナムのVNG(ホーチミン)(評価額4.6億ドル)は「ベトナムのテンセント」と呼ばれる。オンラインゲームからスタートし、今では動画配信、ネット決済、チャットアプリ、クラウドビジネスなど様々な事業に展開している。創業者のミン・リー会長兼CEOはベトナム出身で、豪モナーク大学で金融学を学んだ後、ベトナムの投資会社ビナキャピタルで投資家として一步を踏み出した。ゲーム好きが高じて、2004年に中国のゲームを主にベトナム語にして展開するビナゲーム(現VNG)を創業した。共同創業者のブライアン・ペルツ氏は米国出身で、カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)で社会学を専攻。フランス企業やベトナムIT大手で働いた後、ソン・トゥイというオンラインゲームのスタートアップをベトナムで2014年に創業した。この会社とビナゲームが2005年に合併した<sup>4</sup>。

## ■国内派も少数派ながら存在

国内派も15社の中では少数派だが存在する。インドネシアのトコペディア、ブカラパック、シンガポールのエムダックの創業者はいずれも留学など海外経験なしで起業した。

トコペディア(ジャカルタ)の創業者ウィリアム・タヌウィジャヤCEOはジャカルタの理工系大学ビス・ヌサンタラ(BINUS)大学で情報技術を学んだ。インドコム・メディアタマなど現地のソフトウェア開発会社などで働いた後、2009年に電子商取引サイトを運営するトコペディアを創業した。共同創業者のレオンティヌス・アルファ・エジソン氏はアトマ・ジャヤ・ジョグジャカルタ大学で情報技術を学んだ。ウェブ・デザイナーなどとして働き、メディアタマでタヌウィジャヤ氏と出会った。2人とも海外留学とは無関係なコンピューター系の技術者だ。

トコペディアとライバル関係にあるブカラパック(ジャカルタ)のアフマド・ザキー前CEOはバンドン工科大学でコンピューター科学を学び、卒業後の2010年にブカラパックを創業した。共同創業者で前CTOのヌグロホ・ヘルカヒヨノ氏、ファジュリン・ラシド前マネージング・ダイレクターとはバンドン工科大学の同級生である。トコペディアと同じく、海外留学とは無縁で、地方都市バンドンで学んだ技術者によって創業された<sup>5</sup>。

<sup>4</sup> ペルツ氏は2010年までVNGに在籍。ベトナムとサンフランシスコで複数のスタートアップを立ち上げた後、現在は両地域でスタートアップへのアドバイザーをしている。

<sup>5</sup> ザキー氏とヘルカヒヨノ氏は20年4月、コロナ後の新生活創造を目指すスタートアップに投資するVC、イニット6を設立。ラシド氏は20年6月にテレコム・インドネシアのデジタル部門のヘッドに転じており、創業メンバー3人が会社を去っている。

**エムダック**(シンガポール)(評価額 3.7 億ドル)は一定期間、一定の為替レートでの外貨両替を保証するフィンテック企業。創業者のリチャード・コーCEO はもともとパソコン好きだったが、シンガポールの南洋工科大学 (NTU) で会計学を学んだ。シンガポールのプライスウォーターハウスクーパース (PwC) で会計士として働いた後、プログラミングに通じていたこともあり JP モルガン・チェースのネット為替取引システムの立ち上げに参画。その後、2010 年にエムダックを創業した。共同創業者のジュセン・ウォン前会長はシンガポール国立大学 (NUS) で経済学・数学を学び、シンガポールの証券会社 GK ゴーのエグゼクティブ・ダイレクター兼 CEO などを務めた。GK ゴー在籍中にエムダックの創業に参加している<sup>6</sup>。

## ■シンガポールは外国人起業家多数

東南アジア以外の海外からやってきた外国人起業家もいる。シンガポールのトラックス・イメージ・レコグニッション、ジリンゴ・ショッピング、プロパティグループ、デスケラの 4 社、インドネシアのアクラクだ。クラブの創業者 2 人もマレーシアからシンガポールに来ており、シンガポールは外国人起業家が多数派を占める。

**トラックス・イメージ・レコグニッション**(シンガポール)の創業者のジョエル・バーエル氏はイスラエル出身。テルアビブ大学で物理学を専攻し、英レディング大学ヘンリー・ビジネス・スクールで MBA を取得。視覚的にソフトウェアを作成するツールを提供するテルサス・ソフトウェアをテルアビブで 2003 年に創業し、新たに小売り向けに画像認識で商品管理をするトラックスをシンガポールで 2011 年に設立した。共同創業者のドロール・フェルドハイム CCO (最高商業責任者) はスイス出身で、ウィーンのエウブスター大学でビジネスを専攻。広告関連企業でロシア市場などを担当し、配偶者の仕事の関係でシンガポールに来てバーエル氏と知り合った。同社はシンガポールに本社を置き、イスラエルに開発拠点を持っている。

ファッション系電子商取引サイト、**ジリンゴ・ショッピング**(シンガポール)は評価額 9.7 億ドルでユニコーン目前。創業者アンキティ・ボーズ CEO はインド出身で、ムンバイ大学聖ザビエルカレッジで数学・経済学を学んだ。マッキンゼーのコンサルタント、セコイアのアナリストとしてバンガロールで働いた後、2015 年にジリンゴを創業した。共同創業者のドルーフ・カプーール CTO はインド工科大学 (IIT) グワーハーティー校 (アッサム州) で電気・電子工学を学び、ヤフー、キウィの技術者としてバンガロールで働き、近隣に住んでいたボーズ氏と知り合った。ボーズ氏はバンコクのチャトチャクマーケットで買い物をしていた時に、マーケットに出品している商店の多くが自らのサイトを持っていないことに気付き、こうした商店が扱っている商品をネット販売するジリンゴを始めた。当初はバンコクに拠点を置いたが、東南アジア市場の中心であるシンガポールに移転した。

不動産のネット取引仲介**プロパティグループ**(シンガポール)も評価額 8.5 億ドルで、あと一歩でユニコーンに達する。創業者兼エグゼクティブ・ダイレクター、スティーブ・メルヒッシュ氏は英プリマス大学で情報通信技術、英レディング大学でマーケティングを学んだ。英通信大手ケーブル・アンド・ワイヤレスで働いた後、シンガポールでコミックのネット販売事業やコンサルティング会社などを立ち上げ、2007 年にプロパティグループを創業した。共同創業者のヤニ・ラウティアイネン氏はヘルシンキ工科大学でコンピューター科学を学んだ。フィンランドやフランスでスタートアップを創業・経営し、フランスのビジネススクール INSEAD のシン

<sup>6</sup> 現在はエムダックに出資するピッカーズ・ベンチャーズのパートナーや、為替取引プラットフォームのスパーク・システムズの創業者兼 CEO となっている。

ガポール校で MBA を取得。シンガポールでメルヒッシュ氏と知り合った。

クラウドベースで会計・業務管理ソフトを提供する**デスクテラ**(シンガポール)(評価額 5 億ドル)の創業者ジェシヤンク・ディット CEO は IIT カンパール校で数学・コンピューター科学を専攻し、2008 年にデスクテラを創業した。ブラジェシュ・サチャン CTO ら 3 人の共同創業者はカンパール校の同級生で、2004 年に地元の中小企業向けに会計ソフトを提供し始めた。市場を東南アジアに拡大するため、2008 年にシンガポールに移転した。

シンガポールは才能のある高度外国人人材を経済成長に活用しようと、外国人向けに就労ビザ取得の優遇制度を設けている。シンガポールで会社を設立し、雇用を生み出す起業家向けには 2004 年から就労許可証「アントレパス」を発行している。生活水準も高く、東南アジア市場全体を俯瞰でき、各国へのアクセスも良好なシンガポールは、外国人起業家にとってほかの東南アジア諸国よりも魅力的な拠点となっている。

インドネシアのオンライン専用クレジットカード発行を手掛ける**アクラク**(ジャカルタ)(評価額 4.5 億ドル)は中国人がインドネシアで立ち上げたケースだ。創業者ウィリアム・リー(李文博)CEO は清華大学で法学を専攻し、米ワシントン・アンド・リー大学で法学修士を取得。香港の法律事務所でアソシエイトとなった後、深圳に本社を置く中国平安保険で投資マネジャーとして働いた。銀行口座を持たない人がまだ多くいる東南アジア市場に注目し、2016 年にジャカルタでアクラクを創業。インドネシア、フィリピン、ベトナム、マレーシアで、消費者金融、デジタルバンキング、資産管理ビジネスを展開している。2019 年にはインドネシアの銀行、バンク・ユダ・バクティ(BYB)を買収している。

## ■シンガポール、NUS 中心に学生起業家の育成へ

シンガポールの課題は起業家の「内製化」で、そのロールモデルとなるのが**カルーセル**(シンガポール)。評価額 8.5 億ドルでユニコーン目前のスタートアップで、不要なものを個人間で取引するプラットフォームを提供する「シンガポールのメルカリ」だ。創業者スイルイ・クエック CEO は NUS で経営学を学び、大学を中退して 2012 年にカルーセルを創業した。NUS の短期海外留学制度「NUS 海外カレッジ(NOC)」に参加して、2011 年にスタンフォード大学に留学。現地のスタートアップでインターンシップを経験している。

共同創業者のルーカス・スグー氏も NUS でコンピューター工学を学び、NOC でクエック氏と同時期、同じ場所でインターンシップを体験。共同創業者のマーカス・タン氏も NUS で経営学を専攻。NOC を活用して、クエック氏らよりも 1 年前にスタンフォード大学に留学し 2011 年に卒業。オラクルのコンサルタントとして働いた後にカルーセルの創業に参加した。カルーセルはセコイア、EDBI、楽天などから資金を調達。ノルウェーの携帯電話サービスのテレノールが 2019 年 11 月に投資して傘下のネット広告会社をカルーセルに統合している。

カルーセルの創業者は「留学組」とも分類できるが、あえて「学生起業家」としたのは、同社が NUS の学生起業家育成プロジェクトで生み出された成功事例の一つだからだ。

その中核となる NOC は NUS が 2002 年に開始した制度で、主に学部 3 年生を 1 年間、海外のスタートアップで研修させる。いわば「強制留学」による実体験を通じ、起業家精神を体得してもらおうという仕組みだ。NUS の起業支援組織 NUS エンタープライズのアレンジで、シリコンバレー、ニューヨーク、トロント、上海、北京、深圳、ストックホルム、ミュンヘン、イスラエル、名古屋、ジャカルタ、ベトナムの海外 12 カ所(及びシンガポール国内)の大学などに籍を置いて、スタートアップで働く機会を与える。NOC 卒業生は帰国後に 700 社以上の

会社を創業しており、累計で 5.8 億ドル以上の投資や融資を受けているという。

カルーセルがオフィスを置き、インキュベートされた場所「ブロック 71」はシンガポールのスタートアップ生態系の中心的な存在となっている。NOC 卒業生が帰国後に始めたスタートアップが増えすぎて、NUS はインキュベーション施設を学外に設ける必要に迫られた。取り壊し寸前だったビルを NUS がメディア開発庁（現・情報通信開発庁）、シンガポールテレコム系 VC のシングテル・イノベ 8 と共同で改装・開設して、2011 年にオープンした。カルーセルのように、いくつか成功例も出てきている。不動産のネット取引仲介のナインティナイン・ドット・シーオー（99.co）はセコイア、独保険大手アリアンツなどから、キャッシュバック特典を提供する電子商取引サイトのショップバックは楽天、テマセクなどから出資を受け、チャット方式の接客ソフトのゾピムは米ゼンデスクに買収された。

スタートアップを集め、VC やアクセラレーターを誘致し、様々な交流イベントを開催し、ネットワークを形成する。この「ブロック 71」のビジネスモデルは海を越え、NUSエンタープライズはシリコンバレー、蘇州、そしてインドネシアはジャカルタ、バンドン、ジョグジャカルタの計 5カ所に「ブロック 71」を展開している。2019 年 11 月にはベトナムにも進出することを発表した。

### ■シンガポール政府は創業資金支援

NUS の成功を目にし、シンガポールのほかの大学も学生起業家育成に積極的になっている。シンガポール経営大学（SMU）は 2000 年に米ペンシルベニア大学ウォートンスクールをモデルに設置されたビジネススクールで、企業幹部育成というビジネススクールの目的に加えて、起業家の育成にも力を入れる。2009 年に技術革新・起業家精神研究所（IIE）を設立し、4 週間のアクセラレーター「ビジネス革新創出（BIG）インキュベーション・プログラム」を開始した。年 3 回開催し、これまで 200 社以上を指導。こうした企業が獲得した資金は総額で約 1 億シンガポールドル（約 0.7 億ドル）に達したという。

2009 年に米マサチューセッツ工科大学（MIT）との提携で設立されたシンガポール工科大学（SUTD）も学内にコワーキングスペースを設置し、常時 10～15 のスタートアップを育成できるようにしている。SUTD の学生が 2018 年に創業したノボコールは顧客からの電話による問い合わせに効率的に対応できるシステムを構築し、すでに 2000 社以上の顧客を開拓。コロナ禍下の 20 年 3 月、米 500 スタートアップスなどから 70 万シンガポールドルを調達した。同社は現在 SMU の BIG で経営指導を受けている。NTU も研究成果を商業化する組織 NTU イティブを立ち上げ、「ブロック 71」に隣接する「ブロック 79」に約 500 平方メートルのインキュベーション施設を設けてスタートアップを育成する。

シンガポールでは大学が学生の起業支援のノウハウを蓄積しつつあり、それを政府が資金面で支えるという役割分担が生まれつつある。

中小企業支援を担当する官庁、エンタープライズ・シンガポール（ESG）は 2020 年 8 月、創業支援事業「スタートアップ SG ファウンダー・プログラム」の拡充を発表した<sup>7</sup>。認定メンターから指導を受ける 3 カ月間の「ベンチャー構築プログラム」を新たに開始する。参加するスタートアップの創業者らには月 1500 ドルを給付する。

まずは NUS、NTU、SMU、SUTD、そして 2017 年に設置されたシンガポール社会科学大学（SUSS）を通じて同プログラムをスタートアップに提供する。さらにこれまで 3 万シンガポ

<sup>7</sup> ESG は企業の海外展開を支援する国際企業庁（IE）と、中小企業を支援する機関の規格・生産性・革新庁（SPRING）が 2018 年 4 月に統合して発足した。

ドルだったプレシード段階の助成金を5万シンガポールドルに引き上げた。助成金を受けるにはこれまで通り、創業者らは1万シンガポールドルを自ら調達する必要がある。つまりスタートアップ側が資金を用意すれば、その5倍を政府が出す仕組み。新制度のためESGは1.5億シンガポールドルの予算を確保した。

シンガポール政府はさらにスタートアップの海外展開も後押しする。人口570万人ほどの小さい市場では限界があり、スタートアップが海外市場を開拓するのを積極的に後押ししている。ESGはシンガポール経済開発庁(EDB)と共同で、世界中のアクセラレーターとネットワーク組織「グローバル・イノベーション・アライアンス(GIA)」を構築し、シン

図表2 グローバル・イノベーション・アライアンス(GIA)の提携先

国	都市	提携先
米国	サンフランシスコ	500 Startups
英国	ロンドン	IOT Tribe
フランス	パリ	Hello Tomorrow
ドイツ	ベルリン、ミュンヘン	German Entrepreneurship Asia(GEA)
日本	東京	リバネス(Leave a Nest Singapore)
中国	北京	連接中外創業者(DayDayUp)
	上海	創極無限(Xnode)
	蘇州	—
インド	バンガロール	Anthill Ventures
インドネシア	ジャカルタ	Plug and Play
タイ	バンコク	RISE
ベトナム	ホーチミン	Quest Ventures、Saigon Innovation Hub

(資料)ESG

ガポールのスタートアップを海外に紹介すると同時に、海外のスタートアップがシンガポールを拠点に東南アジア市場を攻略する支援をしている(図表2)。

### ■500スタートアップスが初期段階投資でリード

海外の有力アクセラレーターも東南アジアのスタートアップ育成に乗り出している。ESGが米国のベイエリアのパートナーとして2019年9月に提携したのが、米国のアクセラレーター、500スタートアップスだ。500はYコンビネーター、テックスターズ、プラグ・アンド・プレイなどと並ぶ米国の有力アクセラレーターで、米ピッチブックに2019年で最も活発な初期段階に投資するVCに選ばれている。世界各地にファンドを設立し、グローバルにスタートアップを開拓している。2014年6月に東南アジア地域だけに投資する「500ドリアンズ・ファンド」を創設し、クラブ、カルーセル、ブカラパックなど100社以上に計1000万ドルを投資した(シリーズ企画【2】図表3参照)。投資した元手は2000万ドル以上に増えたという。ゴジェックやクラブが投資するスタートアップにも共同で投資している(同図表5参照)。

2016年10月には2つ目の500ドリアンズ・ファンドの組成を開始し、5000万ドル、200社以上への投資を目標に掲げた。マレーシア政府系VCが主な資金源で、マレーシアのスタートアップに多く投資している。さらに1400万ドルのベトナム専用のファンドや、2000万ドルのタイ専用ファンド「500トゥクトゥクズ」も創設した。現在、3つ目のドリアンズ・ファンドの組成を準備中で、その規模は前回の1.5倍の7500万ドルを想定しているという<sup>8</sup>。コロナ危機でも東南アジアのスタートアップへの投資意欲は衰えるどころか、勢いを増しているようだ。

<sup>8</sup> DealStreetAsia “500 Durians seeks to raise \$75m for third vehicle, closes Fund II at about \$52m” May 18 2020

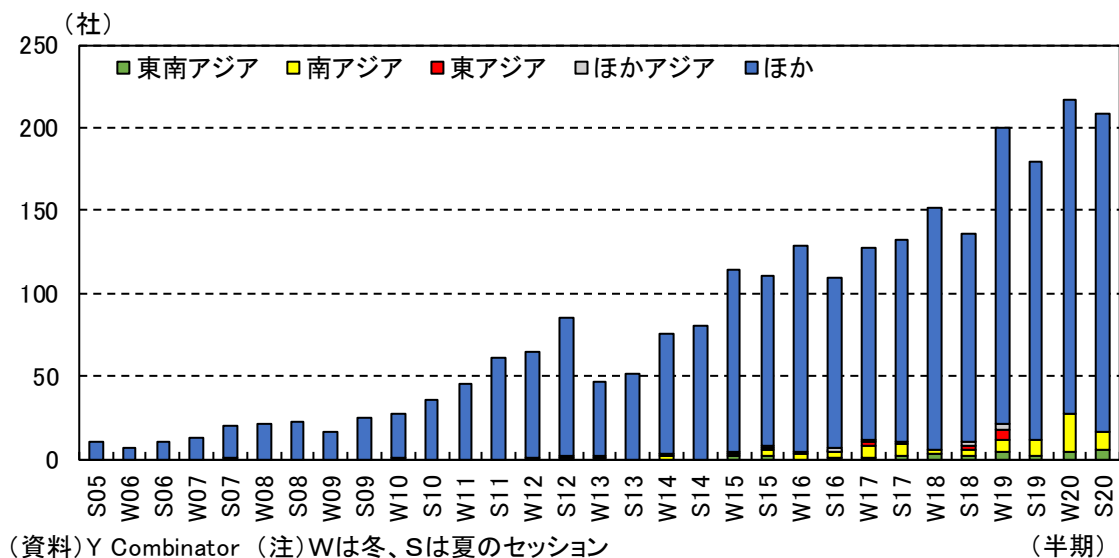
ベイエリアを代表するアクセラレーター、Y コンビネーターは物理的にはアジアには進出はしていないが、アジア企業もシリコンバレーでの育成プログラムに受け入れている。年々、Y コンビネーターの育成コースに参加するアジア企業は増えており、2020年夏のプログラムでは東南アジアから過去最多の6社が参加している(シンガポール5社、インドネシア1社、2020年8月31日現在)(図表3)。コロナ禍でリモート開催となったが、インド企業が前回の半分ほどに減ったのに対し、東南アジア企業は同2社増で勢いがある。

2020年夏のプログラムに参加しているインドネシア企業、**ブクワルン**(ジャカルタ)は、中小企業向けにクラウドベースで帳簿管理ソフトを提供する。同社は2019年に創業したばかりだが、一カ国で完結しない東南アジアの生態系を象徴するような存在といえる。

2人の共同創業者はシンガポールのカルーセルで出会い、2019年に創業した。チンメイ・チョウハン氏はIITボンベイ校でコンピューター科学を専攻し、ハイデラバードのマイクロソフト、クラブで技術者として働き、2018年にカルーセルに転職。アビナイ・ペサディ氏はバーラ技術科学大学ピラニ校(ラジャスタン州)で情報システムを専攻し、ハイデラバードの日立コンサルティング、採用支援スタートアップのピロング・ドット・シーオー(バンガロール)などでマネジメントを担当し、やはり2018年にカルーセルに転職した。

シンガポールの生態系のシンボル「ブロック71」の企業で出会い、市場を求めてインドネシアに渡り起業。ゴジェックとクラブという東南アジアを代表するユニコーン2社から支援を受ける。インド、シンガポール、インドネシア、そしてY コンビネーターのある米国とネットワークを持つ。ブクワルンの今後が注目される。

図表3 Y コンビネーターの育成プログラムへの参加企業数の推移



本稿の無断転載を禁じます。

詳細は総務本部までご照会ください。

公益社団法人 日本経済研究センター

〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7 日経ビル11F

TEL:03-6256-7710 / FAX:03-6256-7924